

真言宗

真言宗は空海すなわち弘法大師（774—835）が開いた宗旨です。

空海は四国の讃岐国・多度郡・屏風ヶ浦(びょうぶがうら)(香川県善通寺市)に生まれ、父を佐伯(さえき)直田公、母は阿刀(あと)氏といます。幼名を真魚(まお)といい、15歳のとき伯父の阿刀大足(おおたり)に伴われて京都に上り、18歳のとき大学に入り歴史、文学、仏典を学びました。このときの勉強がもとで、24歳の時、三教指帰(さんごうしいき)を著しました。仏教に惹かれたのか、大学は退学、20歳にして石淵(いわぶち)の勤操(ごんぞう)について出家、教海と名乗り、22歳の時、東大寺で具足戒(出家の250戒)を受け、空海と改名しました。四国の阿波(徳島県)の大滝嶽や土佐の室戸崎(岬)で求聞持法(ぐもんじほう)などきびしい修行をしたと伝えられていますが、要するに姿を隠していた時代があり、後に奈良に舞い戻りました。その頃、久米寺(奈良県橿原市)で大日経を発見し、密教に深い関心を寄せることとなりました。

そこで、どのようにして紛れ込んだか不明ですが、もともと官吏や僧綱(そうごう)(全国の僧尼を統領し教法の維持を任務とする官職、僧官)との縁故があった空海は、本来、僧としては伝教大師最澄のために用意した遣唐船に乗り込んだのです。

当時、すでに唐では密教が大流行しており、これをいち早く見越した空海は最初から密教の移入を志していました。一方、伝教大師はあくまでも、本来の天台学を極めることを入唐の目的としていました。これは桓武天皇がみずから「天台の妙悟を建立せんと欲して」大学頭(だいがくのかみ)、和気広世(わけのひろよ)に相談し、和気広世は伝教大師と協議した結果、天台の僧が唐へ留学するのがよいであろうということになったという記録があります。当初、伝教大師自らが唐に渡ることは想定していなかったのですが、天皇の命によって、そうなったのです。たまたま、遣唐使を派遣する計画もそれ以前から浮上しており、大使には藤原葛野麻(かどのまろ)呂が任ぜられていました。延暦23年(804年)4月の難破による渡航失敗の後、体勢を立て直して伝教大師と空海は翌年7月、肥前(ひぜん)国松浦郡田浦(たうら)から四船に分乗して遣唐船で出発いたしました。第一船には空海が乗り、第二船に伝教大師が乗船、第三船は難破、第四船はまったく消息不明となりました。第一船は遙か南の福州に漂着、そこから空海はまっすぐ長安に向かい、伝教大師はしばらく、明州に滞在し、その後、天台山のある台州に向かいました。

空海は長安に到着後、翌年5月より12まで青竜寺(しょうりゅうじ)の恵果(けいか)に師事して伝法(でんぼう)阿闍梨(あじゃり)の灌頂(かんじょう)を受け、遍照金剛(へんじょうこんごう)の密号を受け、秘法を授けられたといます。12月に恵果が亡くなったので、翌延暦25年(806年)3月、多くの経論、曼荼羅、法具などを請来して帰国の途につきました。

伝教大師は、妙楽大師湛然(711—782)の弟子で、天台第七祖、天台山修善寺の座主(ざす)、道邃(どうずい)に会いその教えを受け、天台の法門を書写させてもらいました。また、天台仏隴寺(ぶつろうじ)座主(ざす)、行満(ぎょうまん)にも教えを受け書を与えられました。また、しゅく然から禅を受け、密教についても越州で順晷(じゅんぎょう)から、戒律もやはり道邃(どうずい)から円教の菩薩戒を受けました。延暦24年5月、遣唐船第一船で明州を出発、6月に対馬に着き、7月、朝廷へ上表(帰国報告)、典籍などの将来目録を奉りました。空海に比べれば約1年ほど滞在期間が短かったこととなります。

伝教大師は、このようにして天台、密教、禅、律など、あらゆる教えを受けて帰朝したのですが、これは今日では大変奇異に映ることです。しかし、当時は宗旨というものは固定しておらず、たとえて言えば大学でいろいろな科目の単位を修得するようなものでした。この頃は像法の時代で、仏教以外の外道との対決、対比ということが主となる時代で、同じ仏教の中で經典の優劣を論じ、比

較をすることはあっても、同時に学習(兼学)することは不可能でも謗法でもなかったのです。

伝教大師が唐から帰朝した後、天皇は和気広世に詔し、伝教大師将来の天台の法門を天下に流布させたいと凶書寮に命じて書写させました。また、この頃には、すでに密教の唐での流行の様子が日本にも伝わり始めており、天皇は、やはり和気広世に

「真言の秘教等は、未だ此の土に伝うるを得ず。然るに最澄闍梨(さいちょうじゃり)は、幸に此の道を得、良(まこと)に国師たり。宜しく諸寺の智行兼備の者を抜きて、灌頂三摩耶(かんじょうさんまや)を受けしむべし」

という勅が出され、その準備が進められ九月に高雄山寺で法会が行われました。これは桓武天皇の病気とも関連しており、その平癒を祈って灌頂の儀式が行われたといます。しかし、翌、延暦25年3月、桓武天皇は崩御され、平城天皇が即位することになります。

その後、唐の都、長安で密教の中心人物であった恵果から灌頂を受け、夥しい密教の經典を将来して帰ってきた空海に伝教大師はその借覧を頼まれました。これは、あくまでも一途に仏法の全体を究めたいと願う気持ちからですが、そのために空海より年長でありながら、常に一步、へりくだっているのです。最初は伝教大師は法華経と密教を等しく見ておられましたが、後に研究が進むにつれて、やはり法華経を第一として密教は劣るとしました。(ですから、伝教大師は真言宗という宗の字はつけずに、真言といい、一つの仏教の修法として一部を採用したにとどまりました。

空海は大同元年(806年)10月、帰国、しばらく九州に滞在、翌年、勅許を受けて真言宗を開き、最初は和泉の梅尾(とがのお)山に入り、大同4年(809年)7月、京都の高雄山寺(たかおさんじ 神護寺じんごじ)に入ることが初めて許されました。平城天皇が嵯峨(さが)天皇(786—842)に譲位されて3ヶ月後のことです。

流行の真言宗の秘法を行うというふれ込みもあり、書道を通じての親交もあったのでしょう、嵯峨天皇の厚い外護を受けるようになりました。

たび重なる伝教大師からの借覧の申し込みに対して空海は、最初のうちはともかく、だんだん貸し出しを渋るようになり、直接、空海について真言を学ぶべきであるとして本の借覧だけ要請するのは「法の盗人」であると言うようになりました。一説では「理趣(釈)経」の借覧(しゃくらん)を空海が拒絶したことがキッカケとなって両者の関係が悪化したとも言われています。また、伝教大師の弟子、泰範(たいはん)は空海のもとで密教の修学をするうち感化され、ついに伝教大師のもとに戻らず空海の弟子となってしまう、これが義絶のいちばん大きな要因であるとされています。

ともかく、時代の寵児(ちょうじ)という面もあり、空海は真言宗を発展させ、弘仁7年(816年)高野山の開創にとりかかり、これが生涯を通じての一大事業となりました。弘仁14年(823年)東寺(とうじ)(教王護国寺(きょうおうごこくじ))を賜わり、それ以降、ここを真言宗の根本道場として堂塔の建立を果たし、多くの門弟を養成しました。

御祖師様が真言亡国と仰せになったのは、この世界の教主である釈尊よりも、方便として説かれた仏である大日如来を上位に置いて、釈尊と大日如来の関係を逆転させた上、法華経は第三戯論(けろん)(戯論とは義理なく利益のない言葉)の法とけなし、真言秘密三部経(大日経(だいNichikyō)、金剛頂経(こんごうちょうきょう)、蘇悉地経(そしっじきょう))を護國の大法と称して誇っているからです。その上で、権力者に迎合して加持祈禱(かじきとう)を行い、仏法の枠からはずれ人心を乱すので亡国の法と断ぜられているのです。

問ふ、真言亡国とは証文何(い)かなる経論に出づるや。答ふ、法華誹謗(ひぼう)、正法向背の故なり。問ふ、亡国の証文これなくば云何(い)かに信ずべきや。答ふ、謗法の段は勿論なるか。若(も)し謗法ならば亡国墮獄疑ひ無し。(真言見聞 昭定649頁)